



## 北急延伸

2021年4月に市内の別の場所から移転してきた。

ここ船場地区は、繊維卸企業が集まった商業団地で知られる。新駅誕生への道のりには、苦悩もあった。

新駅ができる街に、新しい祭りができる。名前は「ノーボーダー・フェス」。世界各国の言語や音楽、遊び、ファッショントを体験でき、多様性を楽しめる。箕面市の大坂大学箕面キャンパスで30日に開かれる。

企画を考えているのは留学生たちだ。

ロシアから来ているソロキン・アレクサンドルさん(21)は、フェスでは「言語」のブースを担当。宮崎駿さんのアニメを見て、自然に対する考え方と共に感したというアレクサンドルさんは「生まれ育つた場所は違つても、共通点はあるはず。それを知つて欲しい」と話す。その言葉に、鳥山明さんの漫画「Drスランプ」が好きなタイからの留学生、ニムキッティクン・ラダメーさん(22)もうなづく。

キャンパスには外国語学部のほか、50以上の国・地域からの留学生を受け入れている日本語日本文化教育センターがある。北大阪急行(北急)の延伸に伴い、箕面船場阪大前駅ができるのを見越して、

## 住民と留学生 織りなす未来



上 船場のまちに立つ3人の留学生。真後ろに見えるビルが大阪大学箕面キャンパス=箕面市船場東2丁目  
下 箕面船場阪大前駅前には劇場や図書館が入る複合公共施設がある。後ろには建設中のマンションが見える=箕面市船場東3丁目



「遅々として進む、そんな感じでした。まちの形が見えてきて、電車が通るということは、すごいことやなあと実感します」と侯野さん。

延長が関係者間で基本合意に至る3年前の話だ。繊維一筋だったのに、開発業者のようなことをやれというのか、と弱った。

船場地区のルーツは名の通り、商業の中心として栄えた大阪・船場にある。1960年代、高度経済成長で物流が増えた倉庫が足りず、渋滞も深刻になつた。

そこで64年、北に約16km離れたこの地を物流拠点とすることにし、まちをつくつていった。阪神甲子園球場19個分にあたる73㌶の広さから、

ピーカ時の組合員数は約260社。しかし90年代のバブル崩壊後は、グローバル化や流通の変化もあって減少した。「繊維のまち」をどうしていくのか。延長が具体化したのは、そんなころだ。

23年夏には課題解決型の授業で、「近くに放課後の交流場所が少ない」と考えた留学生たちが、繊維卸団地内の元倉庫を借りて臨時のバーを開き、住民を招待した。縁は発展して、今度は住民らが留学生を案内するツアーレイナード。ドイツからの留学生、スヴェンヤ・ヘルビッゲさん(22)も参加した。「箕面の人たちは、もっとといまいちにたいと一生懸命に工夫している。船場も絶対にいいまちになると思います」と話す。

ノーボーダー・フェスでも、住民有志で組織する箕面学生や参加者と一緒にまちを探検し、未来について考えるブースを出す。竹綱章浩代表理事(72)は「留学生は、こちらが思いつかないような新鮮な発想を持っている。交流を深めて、まちも元気になっていけたら」と語る。フェスは来年以降も続ける計画だといふ。



侯野さんは14年に再開発に向けた土地区画整理の準備組合をつくり、駅前約3・3㌶の20社ほどの地権者と話し合い始めた。「売つても構わない」「団地内に移転したい」「新たな事業に参画したい」。思いはさまざまだった。

調整を重ねた末、市に大学や公共施設の用地を売り、残った土地にはマンションや商業施設を建てるこことでまとまりた。現在、駅前には140席の大ホールを持つ劇場、約71万冊を所蔵する図書館、生涯学習センターが一体となつた複合公共施設ができ、キャンパスとデッキでつながる。3棟計11100戸ほどのマンションも建設予定だ。

繊維卸商団地協同組合は、地域住民や大学との「共生」をテーマにしたまちづくり構想を掲げている。

留学生と地元とのつながりも深まつてきている。23年夏には課題解決型の授業で、「近くに放課後の交流場所が少ない」と考えた留学生たちが、繊維卸団地内の元倉庫を借りて臨時のバーを開き、住民を招待した。縁は発展して、今度は住民らが留学生を案内するツアーレイナード。ドイツからの留学生、スヴェンヤ・ヘルビッゲさん(22)も参加した。「箕面の人たちは、もっとといまいちにたいと一生懸命に工夫している。船場も絶対にいいまちになると思います」と話す。